

親鸞さま、なぜお念仏なの？ - 出会おう、語ろう、今ここで -

親鸞聖人のご生涯 (7)

藤谷知道

信心のゆらぎ

聖人がいなくなった関東では、次第に「お念仏は一度でいいの、多いほどいいの」というような教義論争がおこつたり、あるいは「悪人こそ助かるのだから、何でも思い通りにしたらいいんだ」という造悪無碍を唱える人々が出てきました。

こうした誤った考え(異義)を糾すために親鸞聖人の子の善鸞が関東に赴きましたが、善鸞は「本願はしほめる花」などと言って、関東にできた僧伽を混乱に陥れてしまったのです。なぜ、「真実信心」を獲得できず、造悪無碍の異義などに走ってしまったのか？ はたまた、善鸞なんかの言葉に迷わされてしまったのか？ 80歳をこえた親鸞聖人に重い課題が突きつけられました。

愚禿悲歎

こうした課題に向き合う中で出来あがったのが『正像末和讃』です。そこには、

浄土真宗に帰すれども
真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて

清浄の心もさらになし
という「愚禿悲歎述懐和讃」

があります。如来を信じたと思っているわが身を深くのぞいてみれば、わが身一つを護るために如来までも利用しようとする「自力の執心」のごめいていることに気がつき

ました、という懺悔の歌です。まことに、私たちには「真実信心」はあり得ないのです。ただ「虚仮不実」のわが身を悲歎する心だけが、逆説的な意味で「真実信心」と言われるものであります。

恩徳讃

そのように、わが身を深く悲歎する心に、しみじみと届いてくるのが阿弥陀如来のご本願です。親鸞聖人は「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案

ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなきよ」と、

如来のご本願を仰ぎ、
如来大悲の恩徳は
身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も
ほねをくだきても謝すべし

と、如来の御恩徳を歌われしました。

弥陀の本願信ずべし

わが身への「悲歎」と本願への「讃嘆」とが一つであるのが親鸞聖人の教えて下さった「真実信心」であります。

『正像末和讃』の冒頭には、
弥陀の本願信ずべし
本願信ずるひとはみな
摂取不捨の利益にて

無上覚をばささとるなり
という夢告讃が置かれていま

す。聖人は関東のお同行たちと一つになって、救世菩薩よりあらためて「弥陀の本願信ずべし」と教命されたのでした。

聖人の御入滅

弘長二年(一二六二年)、90歳になつていた親鸞聖人は11月下旬より体調をこわされました。その時のご様子について、覚如上人は『御伝鈔』に、「口に世事まじえず、ただ仏恩のふかきことをのぶ。声に余言をあらわさず、もっぱら称名たゆることなし」と記しています。寂かに身を横たえ念仏申されるお姿がしのばれてきます。

そして、「しこうして同第八日午時、頭北面西右脇に臥し給いて、ついに念仏の息たえましましおわりぬ。時に、

頽齡九旬に満ちたまう」と、90年に及んだその御生涯の最後を淡々と記しています。聖人の最期の姿は、「自然法爾」の世界を生きられた聖人にまことにふさわしいものであり

ました。

聖人はかつて、自分のいのちをねらった山伏弁円こと明法房の往生について「明法御坊の往生のよおつらきもつす

べきにはあらねども、かえすがえすうれしうそうろう」と述べられました。

また86歳、最後の御消息には、「この身はいまはとときわまりてそうらえば、さだめてさきだちて往生しそうらわんずれば、浄土にてかならずかならずまぢまいらせそうらうべし」と書かれております。

さらには聖人の御遺言として伝えられてきた「御臨末の御書」には、

一人居て喜ばは
二人と思うべし。
三人と思うべし。
その一人は親鸞なり。

とあります。

親鸞聖人の最期には、聖人以前の念仏者たちがおちいつていた「地獄に墮ちるか、極楽に往けるか」という必死な形相は消え去り、深い寂けさが広がっています。

聖人の御往生は浄土真宗のまことを示した身業説法でありました。

念仏生活を妙好人に学ぶ(10)

恵信尼公

藤谷純子

まず親鸞聖人の奥様である恵信尼公を、妙好人と呼んでいたのかためらわれましたが、善導大師の『観経疏』に「もし念仏の者は、すなわちこれ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上上人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり」とあることから、恵信尼公も妙好人とお呼びしたいと思いました。

お手紙の発見

恵信尼公のことはもちろん、親鸞聖人でさえ実在していたかが疑われていたのですが、大正十年十二月西本願寺の宝庫から鷲尾教導氏によって発見されたお手紙の束によって、親鸞聖人が実在しておられたこと、その妻が恵信尼であり、聖人の求道の歩みも明らかにされました。そのお手紙には、聖人と共に歩んだ恵信尼公の最晩年の暮らし、その思いが綴られている。

発見されたお手紙は「恵信尼

消息」と名付けられ、すべて晩年の親鸞聖人をお世話しておられた末娘の覚信尼宛のもので、恵信尼公75歳から87歳までのわずか10通だけである。

恵信尼公の出自については、関白九条兼実(かねね)に仕えた三善為教(みよし)の娘でないかという説に私は共感を覚えている。そうであれば、恵信尼公は九条家に仕える女房であったのでないか、兼実は法然上人を敬って仏法を求めた人なので、その影響もあって恵信尼公の方が聖人より先に吉水で聞法をしていたのでないか、又さらに三善家の所領のある越後への流罪も、恵信尼公晩年の越後生活まあでもつながるように思われる。比叡山での厳しい求道生活を捨てて、煩惱具足の凡夫の成仏道を求めて法然上人のもとを尋ねてこられた親鸞聖人のお姿を、恵信尼公は見て、その感動を深く胸に焼き付けていなかったら、流罪地での聖人の求道や伝道、また家庭生活も共に歩むことは難しかったのではないかと思われる。

下人たち

「恵信尼消息」の一通目と二通目は京都の末娘・覚信尼の所へ譲り渡す下人(7、8人)の譲り状である。恵信尼は越後に所領を預かっていて、下人達に田畑を耕させていた。厳しい寒さや飢饉もある中、下人達の健康や結婚のことなどにも心配りしながら共に暮らしていた。

聖人の往生について

三通目は、親鸞聖人の臨終を看取った覚信尼の疑念、つまり念仏者の臨終には浄土往生の奇瑞があるのだろうと期待していたにもかかわらず、ただ普通に力尽きて死んでゆかれた事実、不安を抱いた娘に対する恵信尼公の返信である。

まず親鸞聖人が、比叡の山を下りて六角堂に百日こもって聖徳太子の夢告を受け、法然上人の元へ又百日通って念仏門に帰依されたことから書き始めて、聖人の往生は間違いないことを説いている。

さらに恵信尼公にとって親鸞聖人がどういう人であったかについて、今までずっと誰にも言

わずに伏せてきた大事なことを娘に告白している。それは40年も昔、下妻(茨城県)で見た夢のことで、以来、恵信尼は聖人のことを観音菩薩の化身として心深くに秘めて、仕えてきたのだと明かしている。この世限りの夫婦の縁でない、たとえ離れて住んでいても、生きて帰るところを一つにして生きてきたのだと、娘に伝えている。

最期のお手紙

最後の手紙は恵信尼公87歳の時のものである。わずかに10通ほど残されたお手紙を通して、京都に暮らす末娘への母親の情愛の深さと、老いて何もできないもどかしさとが感ぜられる。覚信尼からも母に衣や布、綿や針などを送ってきている。近ければ、親鸞聖人のお墓のことや念仏の法を護持していくことなどを相談できたであつたらうに。しかし越後と京都で、それぞれに厳しい生活を精一杯生きて二人を繋いでいたのが、夫であり父である人の、その教え、念仏の信心だったのであろうか。恵信尼公の声の聞こえてくる

ような、最後のお手紙の一節を記して、そのお心をしのびたいと思います。

あわれ、この世にて、いま一度見まいらせ、又、見えまいらする事候うべき。わが身は極楽へただ今に参り候わんずれ。なに事も暗からずみそなわしまいらすべく候えば、かまえて御念仏申させ給いて、極楽へ参り合わせ給うべし。なおなお、極楽へ参り合いまいらせ候わんずれば、なにとも暗からずこそ候わんずれ。

(文意) ああ、この世では、もう一度あなたに会いにゆくこともできないし、あなたが会いに来て下さることもできないでしょう。この身は、すぐにも極楽へ参るようになるでしょう。ですから、どんなことも暗いことと受け取らなくていいのです。しっかりと念仏申す身になって、かならず極楽で再会致しましょう。大丈夫ですよ、お互い極楽へ往生させていただくことがはつきりしていれば、この世のどんな苦勞も暗く空しいことではないのですよ。